

共に育ち 共に学ぶ

交流及び共同学習

居住地校交流ガイドブック



相互に人格と個性を尊重し合える
共生社会実現のために

協同製作

能代市教育委員会 藤里町教育委員会

三種町教育委員会 八峰町教育委員会

能代支援学校



交流及び共同学習の充実を目指して

能代市教育委員会 教育長 須藤 幸紀

平成27年度、能代山本地区14の小・中学校で、能代支援学校との交流及び共同学習が行われました。例を挙げると、各小・中学校との居住地校交流や、しののめ夏祭りなどがあり、参加した児童生徒にとって、互いを理解し、共に支え合って生きていくことの大切さを学ぶ貴重な機会となりました。

実施に際し、打ち合わせや事前学習など準備に時間を要することもあったと思います。ご尽力いただいた皆様に、深く感謝申し上げます。

連携することで、教育的効果も上がっております。交流及び共同学習をした子どもたちが、自分の目で見て体験し、感じ、考えることで、相互に人格と個性を尊重し合う共生社会の一員としての生き方を考えることにつながっています。

今後の交流及び共同学習のさらなる充実に向け、一層のご理解とご協力を、よろしくお願いいたします。



お互いの心の成長のために

藤里町教育委員会 教育長 浅利 美津子

以前、「しののめ夏祭り」を拝見した際、支援学校に送り出した子ども達の成長ぶりには、驚かされました。みんなと一緒に歌を歌い、みんなと一緒に劇をし、すっかり仲間に溶け込んでいる成長した姿に、こみ上げてくるものを感じました。御指導くださった先生方に、感謝を申し上げます。

藤里小でも、平成26年・27年に、小学校に於いて能代支援学校との居住地校交流が行われました。交流の中から、お互いを理解し、共に支え合い、共に学び合い豊かな人間性が育まれてくると思われます。

これからも、児童生徒にとって、お互いの心の成長のために、交流及び共同学習の推進に期待をいたします。

皆様にも、御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。



継続した交流及び共同学習を

三種町教育委員会 教育長 鎌田 義人

10年ほど前、私が中学校現場にいたところ、能代養護学校との交流が行われていました。小学校で一緒であった友達と、一緒に活動できる喜びの機会をととても楽しみにしている双方の生徒たちでした。

身構えて始めるのではなく、無理のない内容での「交流及び共同学習」からスタートしたことが良かったような感じがしたのですが。

平成27年度は三種町内の小学校2校で3回の交流が行われました。お互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合っていくことの大切さを学ぶ良い機会となったと思います。

今年度は小学校2校と中学校2校の4校から5名の児童生徒が「交流及び共同学習」を希望しているようです。双方の児童生徒が活動を共にする機会を積極的に推進していくことが大切だと思います。そして、継続することだと思います。

一層の推進に向けて、御指導、御協力をお願いいたします。



障害のある子どもと障害のない子どもが、 できるだけ同じ場で共に学ぶ社会を目指して！

八峰町教育委員会 教育長 千葉良一

特別支援学校の児童生徒が、自分の住んでいる地域にある小・中学校で行う交流及び共同学習は、障害のある児童生徒が地域社会の一員として豊かに生きる基盤を作る上で重要な活動と言えます。八峰町においても、平成27年度は小学校2校で6回の活動が実施されました。

今年度も、障害の特性やそれに応じた上手な関わり方ができるように十分な事前学習を行いながら、貴重な学習の機会として取り組めるよう支援して参りたいと考えております。何卒御理解と御協力をお願い致します。

居住地校交流について、希望する全員の実施を目指します

- ・相互の触れ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があり、二つの側面を一体として進めていきます。
- ・双方の児童生徒の実態を共通理解し、安全面での十分な配慮を行いながら進めていきます。
- ・事前、事後学習の中で、双方の児童生徒の理解を深め、継続した交流及び共同学習を実施します。
- ・交流及び共同学習が双方の学校の指導計画に基づいて行われ、かつ学校全体の支援の基に、継続的に行われるように、学習内容についての話し合いを十分行っていきます。
- ・交流及び共同学習には様々な形態があります。居住地校における交流及び共同学習もその一つですが、その他に、学校間における交流及び共同学習、地域の人々との交流及び共同学習、小・中学校における通常学級と特別支援学級との交流及び共同学習などがあります。

目次

1 共生社会を目指して	1
2 障害のことを適切に理解していくために	2
3 居住地校交流の進め方	3
4 出前授業の実際	4
5 交流及び共同学習の実際	5
6 子どもたちの素朴な疑問から	7
7 交流を進めていくと、こんなことも	8

共に育ち、共に学ぶ

障害のある子どもたちにとって

経験を広げて積極的な態度を養い、
社会性や豊かな人間性を育みます。

障害のない子どもたちにとって

障害のある子どもたちとその教育に対する正しい理解と認識を深めたり、思いやりのある心を育てたりする機会となります。

共に、多様な学びを

平成24年7月、中央教育審議会初等中等教育分科会より「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」が取りまとめられました。

私たちが目指す「相互に人格と個性を尊重し合える共生社会」を実現するためには、障害のある人と障害のない人が互いに理解し合うこと、障害のある子どもたちと障害のない子どもたち、及び地域社会の人たちが、触れ合い、共に活動することが大切です。

そのための一つの方法として、交流及び共同学習に取り組んでいます。

交流及び共同学習は、同じ社会に生きる人間として、互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくことの大切さを学ぶ場でもあります。一人の人間としてお互いを受け入れ、理解し、地域に生きる仲間として互いに意識し共に生活するために、「理解啓発」と「よりよい実践の積み重ね」を大切にしていきます。

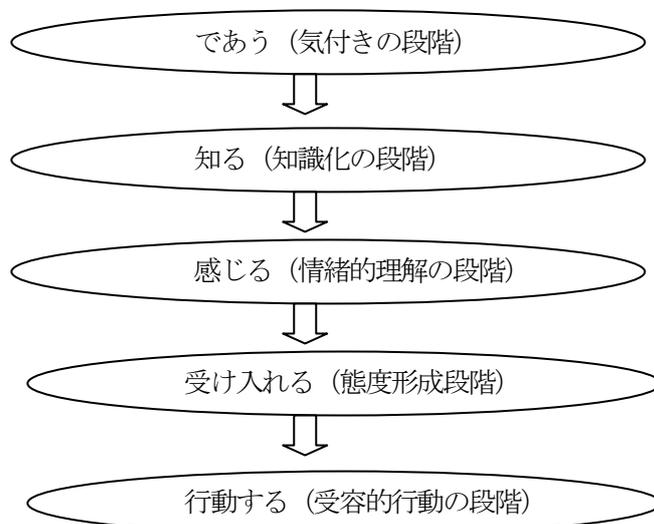
この取組を通して、特別支援学校の子どもたちにとって、自分が住んでいる地域で人間関係を広げ、豊かに暮らしていくために地域の同年代の子どもたちと活動を共にし、交流を深めていくことが大変重要になります。

小・中学校等の子どもたちにとっては、地域の仲間として特別支援学校の子どもたちと関わりながら障害に対する理解を深めていくことができます。

小・中学校段階から共に学び、共に生きていくことで、障害のある人をより自然に受け入れ、共に活動し生きていくことができると考えます。私たちの目指すのは、障害のある人もない人も、共に生きていく共生社会です。

2 障害のことを適切に理解していくために・・・

～「障害理解の発達段階」に応じて進めていきます～



「障害理解の発達段階」

1 気づきの段階

障害のある人がこの世の中に存在していることを気付く段階。この段階は、障害や障害児・者に対する親しみ向上の第1期として位置付けています。

2 知識化の段階

差異がもつ意味を知る段階。そのためには自分の身体の機能を知り、また障害の原因、症状、障害者の生活、障害者への接し方、エチケットなどの広範囲の知識を得る必要があり、この段階で学びます。

3 情緒的理解の段階

障害者の機能面での障害や社会的な痛みを「こころで感じる段階」。ここでは、哀れみや同情、罪悪感、不安などのネガティブな感情も含まれます。このような感情を持ちながら、いろいろな体験を通して障害児・者をより身近に感じられるように、また受け入れるように促して教育していきます。

4 態度形成段階

十分な第2段階の学習と第3段階の体験を得た結果、適切な認識(体験的裏付けをもった知識、障害観)が形成され障害者に対する適正な態度ができる段階と捉え進めていきます。

5 受容的行動の段階

生活場面での受容、援助行動の発言の段階。すなわち自分たちの生活する社会的集団(学校、クラブ、会社、地域、趣味のグループなど)に障害者が参加することを当然のように受け入れ、また障害者に対する援助行動が自発的に現れる段階と捉えます。

参考)「障害理解～心のバリアフリーの理論と実践～」 誠信書房 徳田克己・水野智美 編著

3 居住地校交流の進め方

交流の内容	小・中学校の動き	特別支援学校の動き
		① 保護者からの希望の確認 ② 教頭から、交流校に依頼
	③ 今後の進め方を検討（両校特別支援教育コーディネーター、担任） ・ねらい、内容、日にち ・対象児童・生徒の説明 ・出前授業（必要に応じて）	
		④ 実施計画を作成、相手校に依頼
⑤ 出前授業 （特別支援学校コーディネーター） ※ビデオレターによる交流を含む		
	⑥ 事前学習	⑥ 事前学習
⑦ 居住地校交流		
	⑧ 事後学習	⑧ 事後学習
⑨ ビデオ、手紙での交流		
		⑩ 交流校（児童、職員）へのアンケートの実施、まとめ
	⑪ 次年度の計画検討 （両校特別支援教育コーディネーター、担任）	



久しぶりに会った友達とハイタッチ



仲間と祭りを盛り上げました。わっしょい！！

4 出前授業の実際（小学校の例）

～児童の年齢、交流学习の段階などに応じて、出前授業の内容を変えて行っていきます～

※事例1（低学年の場合）

学習活動	指導のねらい
<ul style="list-style-type: none"> ・「ちびまるこちゃんが、けがをしました。」の話を聞く。 ・「びびび王国」を体験する。 *びびび王国～「びびび」のみを使って絵カードの内容（食べ物、学習道具など）を友達に伝えるゲーム ・「なかよしポイント」を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・けがをしたちびまる子ちゃんに対する感情を意識する。（かわいそう、助けたいなど） ・言葉以外の伝達手段を使って、友達に自分の意思を伝える経験をする。 ・障害のある友達への関わり方を学ぶ。 ・交流する相手との関わり方を学ぶ。

※事例2（高学年の場合）

学習活動	指導のねらい
<ul style="list-style-type: none"> ・「校長先生が、けがをしました。」の話を聞く。 ・「魔法の指」を体験する。 ・「障害がある」ことについて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・けがをした校長先生に対する感情を意識する。（単に「お世話する」だけでなく、「必要としている支援」を考え実行できるようにする） ・ボディタッチを通して、相手を意識することを体験しながら、人との関わりについて考える。 ・いろんな人がいること、一人一人みんな違うこと、みんな大切な存在であることを意識できるようにする。

※事例3（交流を重ね、交流した個人の理解をすすめたい場合）

学習活動	指導のねらい
<ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇さん劇場」を見る。 (シーン1) ～「ブイッ」とそっぽを向く (原因) 恥ずかしいんだね (対応) 自分から近付いてきたら仲間に入れてね (シーン2) ～やりたいんだけど、素直にみんなの中に入れない (原因) やりたいのに、逃げちゃうんだね (対応) 待っていれば、来てくれるよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害児がなぜそのような行動をするのか、その意味を知る。 ・どう対応すればよいかを考え、実際に行動する。

【出前授業を受けての児童の感想から・・・】

- ・びびび王国で伝わってよかったです。いつもは、スーパーで見かけても何も話さなかった。今日の授業で分かったので、今度会ったら勇気を出して話しかけたいと思います。
- ・保育園の時いじめていたけど、理由が分かったので、今度の交流の時は仲良くしたいです。
- ・なぜだか分からないけど、「魔法の手」で暖かい気持ちになりました。こんな気持ちで、人と付き合いたいと思いました。

5 交流及び共同学習の実際

～たくさんの学校で、いろいろな学習に取り組んでいます。～

・教科学習

図画工作科（のびる絵、似顔絵をかこう、新聞紙で遊ぼう等）



特別支援学校児童の描いた絵をきっかけに、交流校児童が絵を継ぎ足して、新しい絵を完成させました。



特別支援学校児童の描いた家の絵を基に、理想の家を考え、内装や家の仕組みを書き加えました。



はさみや手で切った新聞紙をつなげ、友達と一緒に部屋の中に張って迷路を作りました。

音楽科（楽器で遊ぼう、一緒に歌おう等）



紙の鍵盤を机上におき、演奏の練習をしました。同時にリズム打ちも行いました。
特別支援学校の児童が紹介した歌と一緒に歌いました



生活科（秋で遊ぼう、図書館探検等）



拾ってきた木の実や、紙コップなどを使ってお店屋さんごっこをしました。

体育科（なかよしゲーム、ボールで遊ぼう、運動会に向けて、ダンスをしよう等）



特別支援学校児童の好きなボールを使って、ボールおくりなどの活動に参加しました。



なかよしゲームの始めにじゃんけん列車に参加した。みんな一緒に楽しみました。



運動会前に、一緒に学年競技の練習に参加。ウォーカーの児童も友達に手伝ってもらって参加しました。

・総合的な学習の時間

小学4年生の「総合的な学習の時間」の中の、「福祉」を学習する時間の中で、居住地校交流を実施する学校もあります。

(命の授業、老人ホームにいこう、芸術活動に参加しよう、地域を探検しよう等)



模擬体験を交えながら、命について考え、友達と一緒に活動に取り組みました。



交流校の行事、老人施設への訪問と一緒に参加。事前練習では、はっぴをたたむのを手伝ってもらいました。



交流校の芸術活動体験に参加。プロのダンスパフォーマンスに触れ、表現する楽しさを体感した。

・中学部では、地域での学習に参加

(職場体験、地域の祭りに参加しよう、地域貢献活動等)



地域貢献活動として、空きビン回収に参加。小学校からの仲間と力を合わせて、学習に取り組みました。

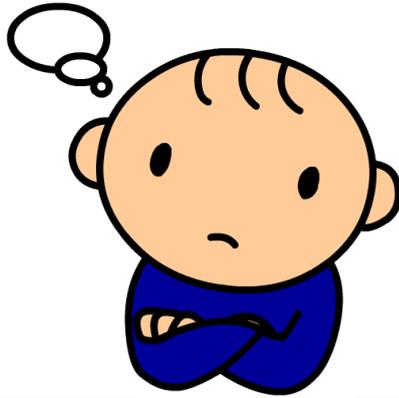


老人施設への訪問に参加しました。事前学習で一緒に練習した音楽を披露しました。多少の気恥ずかしさも、仲間と一緒に活動であれば、なんなくクリアできました。



おなごりフェスティバルに参加しました。事前の練習から活動することで、仲間とも仲良くなりました。仲間と一緒に活動に参加することで、大勢の観客の前でも堂々と活動することができました。

6 子どもたちの素朴な疑問から



どうして、遊びとうすると逃げていくの？

↓
遊びたいけど、恥ずかしい気持ちでいっぱいになるんだね。

↓
自分から、近付いて来てくれるまで待っていられるかな。そうすれば、一緒に遊べるよ。



出前授業で、回答しました。(参考；P4表)

どうして、私たちみたいにしゃべれないんですか？

↓
友達と話をすることが苦手な人は、特別支援学校にはいます。話さなくても気持ちが通じることがあるよね。言葉を使わなくても、仲良くなれるかな。



出前授業で、体験、回答しました。(参考；P4表)

なんで、特別支援学校にいったのかな？

↓
ゆっくり学習に取り組んでいるんだね。そのために、特別支援学校で学んでいるんだね。



出前授業で、回答しました。(参考；P4表)



みんなに見守られて自分からアークをくぐる

7 交流を進めていくと、こんなことも

1回目の交流を終えて、なかなか集団に入れないA児の様子を見て

交流校の担任からこんなつぶやきが・・・。「保育園でA児を見たことはあったから知っているけど、どう理解して、どう接していいかわからない児童がたくさんいる」

出前授業の中で「Aちゃん劇場」をしました。
～せっかく誘っても、逃げていくAちゃん。～
きっと恥ずかしいんだね。待ってればいいよ。

出前授業後の児童の感想から

「保育園にいた時にいじめていたけど、今度の交流の時は仲良くしたいです」



実際の交流後の感想から

「Aちゃんと仲良くなれて、楽しかったです」

このエピソードから考えたこと。
障害のない児童が、障害のある児童との関わり方について悩んでいることを、交流校の職員から聞くことで、出前授業のねらいを考えることができ、交流校の障害理解につながりました。事前の話合いの大切さを実感しました。

2回目の交流（ダンス）で、B児が集団から離れて座り込むという場面が・・・。

交流校職員が対応しようと近付いたら、怒り出した。支援学校職員がB児の状況と対応を説明して、離れて見守るようにした。

授業の終わりの感想発表時に、特別支援学校職員が、B児のことを説明した。

「ダンスをととても楽しみにして練習してきた。交流でみんなに会えることを、楽しみにしていた。」と伝えると・・・。



交流校児童がB児に近付いて声を掛けると、自ら立ち上がった。その場で音楽が流れ、B児を囲むようにしてダンスが始まった。

このエピソードから考えたこと。
B児と一緒に活動するという経験をしたことで気が付く、B児の行動の特徴。どうしたら仲良くできるかを障害のない児童と共に考え、討論するという形で事後学習を行い児童とともに考えながら障害理解を進めていくことを検討中です。

出前授業の中で、「びびび王国」（びびびという発声とジェスチャーで相手と関わる体験）をしたら・・・

児童の感想から

「びびび王国」で、伝わってよかったです。

いつもは、スーパーで見かけても何も話さなかった。今日の授業で分かったので、今度スーパーで会ったら勇気を出して話したいと思います。

このエピソードから考えたこと。

障害の理解や受け入れ方は、一人一人違っています。出前授業でできることは、みんな同じ人間で仲間だということを基本にしながら、「障害のある友達とどう付き合っていくか」ということを、交流校の児童も自分なりに考えるきっかけを作ることではないかと思いません。

交流を行った交流校の児童全員にアンケートをとったら、こんな意見がありました。

「どうして、保育園の時は一緒に、1年生になったら別の学校に行ったのですか」

「〇さんは、病気は治らないんですか。生まれたときからですか」

「なんで、私たちみたいにしゃべらないんですか」

このアンケートから考えたこと。

障害のある児童と出会い、一緒に活動したからこそ、このような思いや感想が出てくるのだと思います。一緒に遊び、学ぶ中で、障害のない児童が「自分たちと同じ仲間」として意識した時に、自分たちと違うことに気付き、どうしたら仲良くなれるのかを考えた結果出てきた質問のように思います。

障害があることに気付くこと、それが障害理解の第一歩だと思います。そして、「違っていても友達」と違いを受け入れ、その上で、障害のある人もない人も同じ仲間として活動する。そんな集団へと進めていきたいと考えます。交流および共同学習は、それを学ぶよい機会と捉えています。子どもたちの交流の様子や関わり方を見ながら、段階を踏んで少しずつ進めていきます。そして、効果のあるものにしていくためには、交流校とのより確かな連携が不可欠です。

目指すのは、障害のある人もない人も、地域で共に豊かに生活する姿です。